

FRIENDS 2

part.2

For adult only

mechi

Contents

BABY MOON	3
shall we…?	42
推し CP のスケベが見たい 2021 秋	65

このたびは、当同人誌を
お手にとっていただき、誠にありがとうございました。
お手に取って読みたいと思っていただき、ありがたく思います。

この本は、2022 年に発行した同人誌を受注頒布用に整えたものです。
お楽しみいただけましたら幸いです。

BABY MOON

それは、いつもと変わらない晩秋の夜のこと。

三日月と満天の星が、あと3日もすれば枯れ葉が落ちきり、冬が訪れることを教えてくれていた。

「そろそろ食いモンが冬眠するんだな、わかった」

呟く狼の口から、白い息がこぼれた時だった。

閃光が夜空を斜め下へと切り裂き、森の西へと光が吸い込まれてすぐ、耳をつんざくような轟音が森を激しく揺るがした。

一部始終を見ていた狼はぽかんと口を開けていたが、尋常ならざる事態に咄嗟に立ち上がった。

「アレは一体なんだ？」

生まれてこのかた、俺の森でこんなことが起きたことがない。

恐れを知らない狼は、ワクワクしながら昼間のように明るい森の西へと向かった。

森の西（少し北にはシカの縄張りがあり、その東南は特にウサギ達の巣が多い場所）には、巨大な何かがあっ

た。空から落ちてきた時になぎ倒した木々を燃やし、赤々と照らし出されたそれは、至る所から黒い靄のようなものをおぼろげに吹き上げている。

狼は、人間の宇宙船はもちろん、人間も、火も見たとがなかったが、奇つ怪な岩山（宇宙船）からよい匂いがしてくるので興奮した。さらには、木々にくっついていいる赤いもの（火）が暖かいことを知って感動した。しかし、近寄りすぎるとひげがチリと焦げて、慌てて飛び退いた。

「これはいいものだが、危ない」

岩山の所々にも赤いものがつき、不快な黒い靄（煙）は止みそうに見えない。

「しばらく様子を見てやろう」

狼は宇宙船から15mほど離れた所の、燃えるカラマツの火の熱がほどよく届く温かい場所に寝そべった。

* * *